神器を〝徴〟したる道德思想の展開、本居宣長の名歌「敷島の大和心」についての二篇が添へられてある。國民教育に携はる人は勿論「日本」に就て多少とも思を潜める士の一讀すべきものであらう。（菊判二一八三頁　東京教育研究會發行　定價二、五〇）

●名家筆蹟考　森本　繁夫編

南北朝時代より最近に至る物故四百名家の筆蹟四百二十九點を凸版網版として編纂したものである。その內容は諸方面に亘り網羅されてゐるが、中には左迄重要と思はざる人物をまでも含める半面遺すべからざるもので採擇に漏れてゐるものも少くないのは、著者所藏のものを主とした點より致方あるまい。それにしても遺は有數の短册蒐集家として聞えた著者ならではと頷かせるものがあつて、多方面の名士の風格を窺ふに便利であり後に附加された簡明な解說は本書の觀賞に役立つ所がいであらう。（四六倍判アート紙一七〇枚解說九二頁　大阪活版所發行　定價和裝一〇、〇〇洋裝八、〇〇）〔以上藤〕

●近世城下町の研究　小野　均著

近世文化の母胎として都市生活の發展を考察することは甚興味がある。而も我國に於ける近世都市はその大部分を城下町として成立、發達したから近世都市の研究は自ら近世城下町をその中心とせねばならぬ。然るにこの問題はその材料が全國に散在し而も頗る多數であるが爲に近世文化の考究に從ふ人々も敢てこれに着手しなかつたところである。著者小野氏はこれを慨し拮据經營廣く搜り深く思ひてこの篇を成した。その勞察するに餘りあるところ筆を近世都市の勃興に起し次いで城下町の成立を說きその組織を論じその沒落に結んで居る。從來この方面に於ける研究は絕無とはいへないが多くは部分的のものであり未だ全體として綜合的に觀られたものは無かつた。その點に於て本書は最初の研究であり而も大きな效果を擧げたものとして深くその勞を謝すべきである。本書が主として取扱へる經濟的方面以外に、他の文化諸相が攻究せられ、城下町の特質を更に明かにして、近世文化の簡明に資せらるれば、幸の大なるものがある。（菊判二九八頁　東京至文堂發行　價二、五〇）

●天平の文化　朝日新聞社編

奈良に遊ぶものは必ず天平を想ふ。天平の文化は世界的多樣を含み宏大にして絢爛である。今にして之を顧るに興趣頗る豐なるを覺える。ここに見るところあり大阪朝日新聞社は嚮に天平文化記念會を組織し斯道の大家に請ふて一般と共に天平文化の諸相を聽いた。本書は實にその講演集であり、これによつて更に天平文化宣揚の範圍を擴大せんとするものである。收むるところ十七篇、政治、佛教、藝術、工藝、風俗、建築、國語、萬葉、都城、民衆等誠に天平の文化それ自體の如く多樣にして燦然として居る。人は各その好むところに從つてこの天平學の饗宴を樂むことが出來るであらう。（菊判五〇七頁　大阪朝日新聞社發行　價二、〇〇）

●武家時代社會の研究　牧野信之助著

著者廿年の業蹟を集めたものである。題して武家時代社會の研究といふも固より社會の形態的研究たるに止らず廣き社會生活を對象とする歷史的研究である。從つて法制經濟史上の諸問題、土地制度及聚落問題、時勢及社會相、教界と名僧の四篇に收められた大小三十三篇は或は武家の族的結合を說き搖籃期に於ける近江商人の狀を明め或は割地の起源を論じ太閤の檢地を究め或は中世末期に於ける村落結合の形態を考へ或は一休宗純の狂態を觀又江東に於ける一絲和尙の姿を描きしなど諸方面に亘つては居るがなほそれらを通じて一貫せる著者の興味と學的態度を見ることが出來る。人も知る如く著者は多年福井滋賀の諸縣史編纂に從ひ地方民間の史料に接する機會多かりしもの、それに基く武家時代の社會的研究は著者の眞摯にして且つ常に全體を見失ふまいとする努力を得て現代日本社會の性質を考へんとする人々に對し寄與することこと最大である。近來出色の論文集として江湖の一讀を薦める所以である。（菊判六三〇頁　東京刀江書院發行　價五、八〇）〔以上肥後〕

●明治戊辰　文明協會編

本書は御卽位大典並に文明協會創立二十周年記念の爲めに出版されたもので、茲に至つた經緯は昨年同會が記念式典を擧行した時、明治史專攻の諸家が多く參會され